

覇者の戦塵1944
サイパン^{よう}邀撃戦^{げき}^{せん} 上

谷 甲州

Koshu Tani

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 挿
図 画
ら い と す た つ
ふ 佐藤道明

覇者の戦塵 1944

サイパン邀撃戦

上

目次

序章 撤収

10

第一章 重雷装艦大井

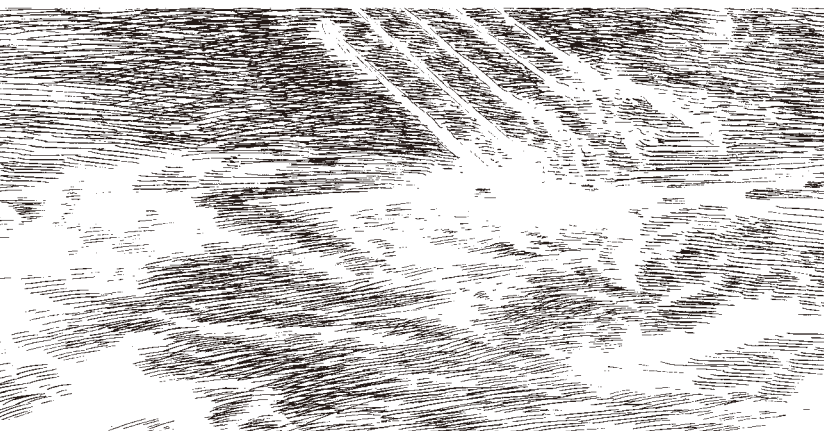
20

第二章 夜襲艦隊

45

第三章 砲雷撃戦

77



第四章 追撃

115

第五章 大口径狙撃

153

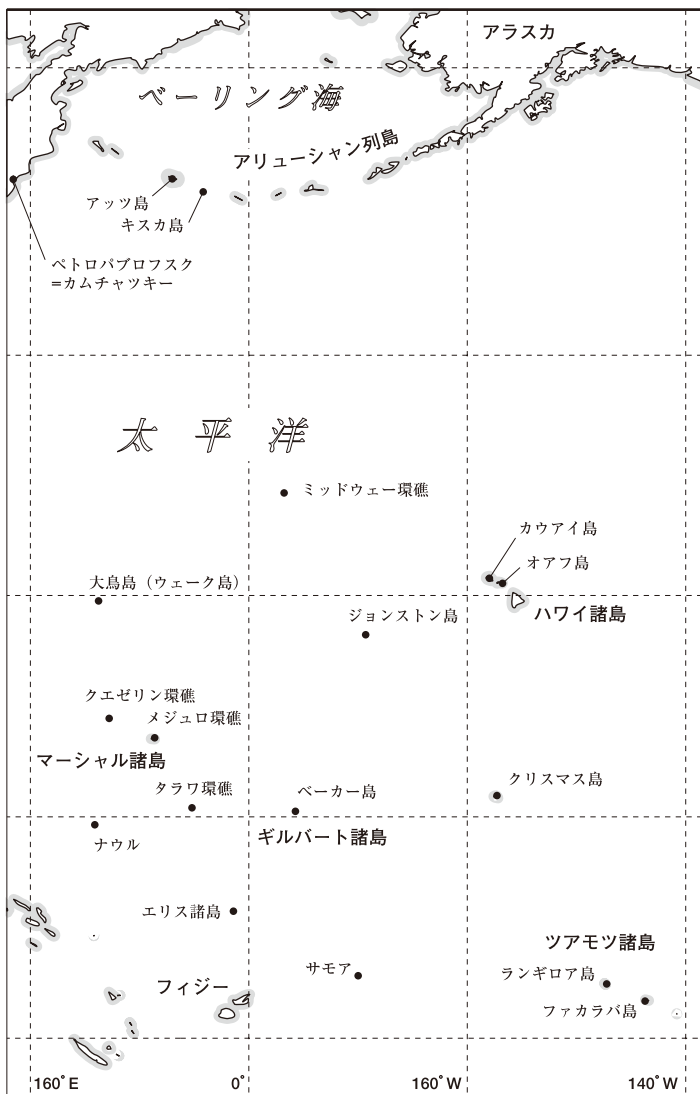
転章 メジユロ環礁

191

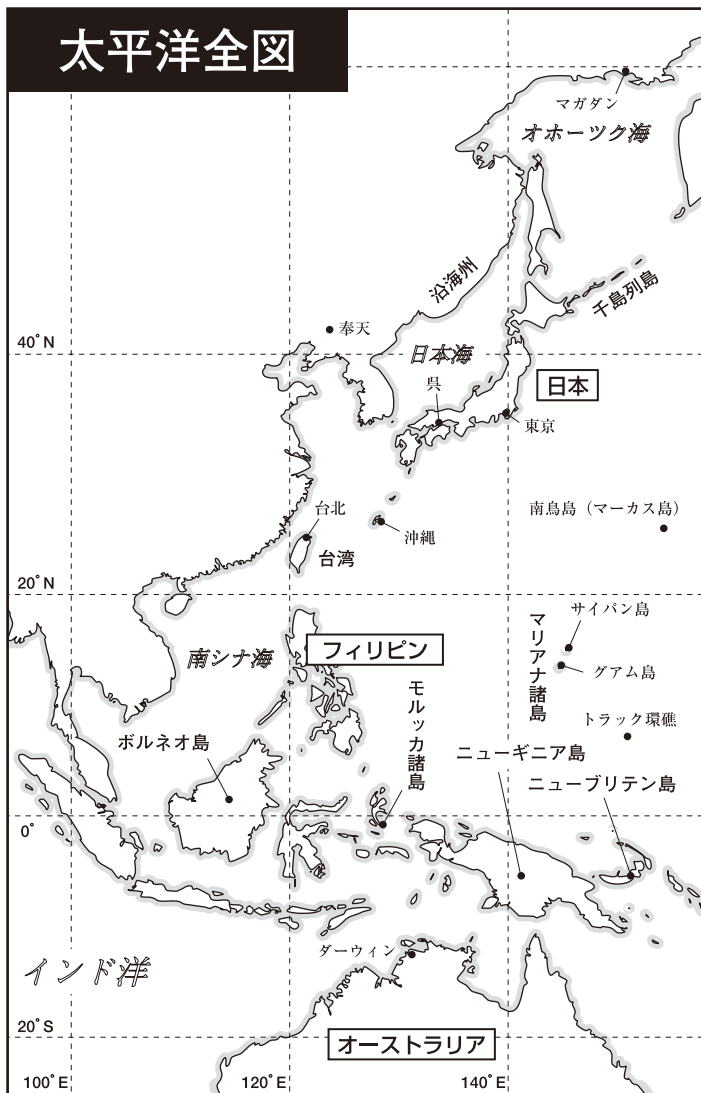
あとがき

201

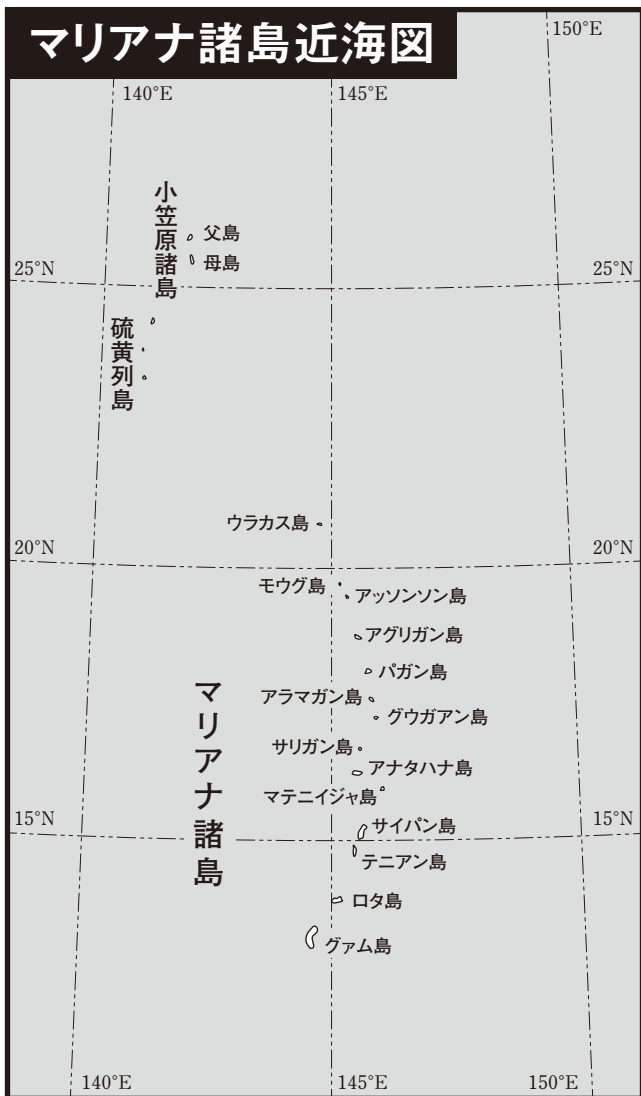




太平洋全図



マリアナ諸島近海図



覇者の戦塵 1944 サイパン邀撃戦 上

序 章 撤収

事実上の敗走であることは、誰もが気づいていた。

航空戦の開始から数日で日本側の稼働機は激減し、実質的な作戦能力を失っていた。わずかに残った機体も、連日の空襲でさらに消耗しつつある。すでに制空権は敵手に落ちて、昼間に離発着することも困難になっていた。

彩帆島^{サイパン}の戦況だけが、悪化していたのではない。基地航空隊の第一航空艦隊が司令部をおくテニアン島でも、状況は似たようなものらしい。むしろ有力な部隊が展開してただけに、ここよりも激しい空襲を受けたのではないか。

そんな中で、移動の命令が届いた。日没の直後だった。これ以上の消耗を避けるため、残存する機材を後方に下げるのだという。当



面の目的地は部隊によってことなるが、今後は避退先の基地を拠点にサイパンにおける戦闘を支援するという。

——だが、本当に帰ってくるものはいないだろう。

滑走路の端で発進作業を見守りながら、澤谷特務少尉は考えていた。少尉ばかりではなかった。残存機に搭乗して去る者とはもとより、残留する者も思いはおなじだった。口には出さないが、陰鬱な雰囲気だけは伝わってくる。

これは一時的な避難などではなく、部隊再編のための後退なのではないか。短期間で戦力を回復するには、被害が大きすぎたのだ。残留する部隊の士気にかかわるから明言はできないが、実際には負け戦にともなう撤退でしかないのだろう。

発進は夜半をすぎるところからはじまった。東の水平線上に昇りはじめた月の光に照らされて、一機ずつ離陸していく。そして数は多くなかった。わずかな時間で離陸は終了し、機影は闇にのみ込まれた。

だが澤谷特務少尉は、移動を命じられなかった。搭乗する機体が



なかったわけではない。愛機の陸上哨戒機「東海」は、数少ない稼働機のひとつだった。連日の出動で不具合が生じているものの、飛行自体に支障はなかった。

それにもかかわらず残留が決まったのは、やるべきことがまだ残っているせいかもしれない。負傷して機をおりた搭乗員もいたが、手まわしよく他の機体から補充されていた。不具合個所の修理も終わっていたから、命じられればいつでも飛べる状態になっている。

——だが……あと何度、自分たちは飛べるのか。

そんなことを、ふと思った。連日の爆撃で、滑走路はかなり損傷している。敵の航空部隊にとっては、最優先で破壊すべき攻撃目標なのだろう。しかも上空からの視認が容易で、偽装することができない。空襲のたびに、大量の爆弾が落とされた。

無論、滑走路の補修は迅速におこなわれた。たとえ航空戦力が壊滅状態におちいっても、基地機能は維持しなければならない。最後の一機が撃破されたあとでも、この方針に変化はないはずだ。

滑走路が穴だらけのまま放置されていたら、苦しい戦力事情を敵



に察知されてしまうからだ。すでに制空権は失われていたが、滑走路が健在なら敵は警戒せざるをえない。いつ飛来するかもしれない日本軍機にそなえて、戦力の一部を待機させる必要がある。

そんな状況だから残存機の撤退は、何があっても知られてはならなかった。損傷は最優先で修復されているが、それにも限界がある。出撃はしたもの、滑走路が破壊されて着陸できない可能性もあった。

だから次の出撃が最後になるかもしれないし、離陸さえできないまますべてが終わる可能性もある。滑走路に対する敵の空襲は、それほど熾烈で容赦のないものだった。そう考えれば米軍の本格的な上陸作戦は、間近に迫っていると推測できる。

米軍のやることは、何ごとも徹底していた。そして上陸戦闘における航空戦力の存在は、無視できないものがあつた。わずか数機程度の対地攻撃機が、上陸部隊の侵攻を阻止した例もあつた。その戦訓を、用意周到な米軍が見逃すとは思えない。

万全の態勢でのぞむのであれば、何度でも執拗に滑走路を攻撃し



ようにするだろう。だが敵機の跳梁を阻止しうる有力な航空戦力は、日本側には残されていなかった。基地航空隊は作戦能力を失い、母艦航空隊も無力化されていた。

一〇隻もの空母を中核に編成された第一機動艦隊が、敵空母機動部隊との航空戦に破れて後退したのは数日前のことだ。公言する者はいなかったが、こんな話はすぐに伝わってくる。母艦機の搭乗員によれば、三隻が沈められたらしい。

残りの空母もなんらかの被害を受けて、搭載機の発艦が困難になっているという。それが事実なら、実質的に無力化されたといつてよかった。ただし別の搭乗員によれば、敵空母群にも大きな被害を与えたともいう。

だがこちらの方は未確認情報もふくまれているため、信憑性はそれほど高くなかった。情報源にもよるが、正規空母と軽空母あわせて四隻を沈めたという話もあった。事実なら大戦果だが、さすがにこれは誇大報告の類だろう。

少なくとも敵の航空戦力が、航空戦の前後で劇的に変化したとい



う印象はない。空母機動部隊同士の戦闘があつた日をのぞけば、空襲が途切れることもなかった。たしかに飛来する機体の数は減少しているものの、これは予定された行動と考えられる。

連日の大規模な空襲は、滑走路以外にも大きな被害をあたえていた。ことに航空隊の壊滅によって唯一の迎撃手段となつた高射砲陣地には、集中的に爆弾が投じられた。だが対空陣地は滑走路ほど修復が容易ではないため、日ごとに火力が低下していた。

米軍は圧倒的な航空戦力を投入してきたのだから、当然これは予想された事態だつたはずだ。空襲がつづくにつれて日本側の防衛火網は弱体化し、それに比して投入される米軍機も減少する。連日の出撃で、不具合が生じた機体も多いはずだ。

つまり米軍の航空戦力が減少することは、当初から織り込み済みなのではないか。あるいは米軍による空襲は、すでにその目的を果たしたのかもしれない。大量の爆弾をばらまいた結果、攻撃目標がなくなつてしまったともいえる。

昨日も多数の母艦搭載機が飛来したが、対空陣地に対しては重箱



の隅をつつくような爆撃にしかなかった。だが島には、それ以外にも多数の攻撃目標が残存している。ことに島の全域にわたって構築された縦深陣地は、いずれも健在だった。

広い範囲に点在しているから位置を特定するのが困難で、しかも巧妙に偽装されていた。さらに地形を利用して堅固に防御されているから、空からの攻撃で破壊することは困難だった。最終的には上陸した陸上部隊が、ひとつずつ潰していくしかない。

おそらく上陸戦闘に先立って、大規模な艦砲射撃が実施されるはずだと澤谷特務少尉は考えていた。それが米軍の常套手段だった。艦砲によって予想戦場とその周辺を制圧し、戦う前に守備隊の戦力を可能なかぎり消耗させるためだ。

初期のころは座礁をおそれたのか、小艦艇による機動的な砲撃が主だった。ところが最近の戦闘では、戦艦や重巡洋艦などの大型艦を何隻も投入してくる。すでにその前兆は、サイパン島の近辺でもあった。

昨日の日没間際になって、陸上基地の電探が艦影をとらえたのだ。



状況からして、敵艦であることは間違いない。艦影は海上が闇に閉ざされてからも接近をつづけた。いつ砲撃がはじまってもおかしくない状態だったが、このときは何も起こらなかった。

海岸線から一定の距離をたもったまま、遊弋してただけだ。そして夜半よりも前に、引きあげていった。おそらく潮流や水深などを確認するとともに、日本側の常用する電測兵器の特性を測定していたのだろう。

だがそのときは事情がわからないまま、すべての作業を中断して夜間砲撃にそなえるしかなかった。滑走路に引きだされていた機体は離陸準備を中止し、掩体にもどって待機をいられた。陸上砲台のいくつかは、敵の奇襲上陸を警戒して臨戦態勢に入っていた。

だが艦影は積極的な行動をとろうとはせず、月が昇る前に姿を消した。まるで夜陰に乗じて侵入した夜盗のように、日本軍の庭先に踏みこんで去っていっただけだ。腹立たしいかぎりだが、いまは隠忍自重するしかない。

そのあと艦影は再接近しなかったが、緊張感は消えることがなか



った。頭の芯が妙に冷え冷えとして、仮眠をとる気にもなれない。夜明けまでの間に、まだ何か起こりそうな予感があった。

澤谷特務少尉は周囲に眼をむけた。先ほどまで何人かが帽子をふっていたのだが、全機が無事に離陸したのを見届けたあとと立ち去ったようだ。少尉自身も、ここにとどまる理由はなかった。さしあたり掩体に足をはこんで、愛機を点検しておこうと考えた。

人かげの接近に気づいたのは、その直後だった。偵察員の高須二飛曹らしい。勢いこんで、駆けてくる。ただならぬ気配に、少尉は緊張した。予感は的中したようだ。少尉をみつけた高須二飛曹は、呼吸をととのえる余裕もないまいった。

「対潜警戒です。出動予定海域は——」

「これから……なのか？」

眉をよせて、澤谷特務少尉はたずねた。指定された海域は遠く、進出するだけでかなり時間がかかりそうだった。いまから出動したのでは、帰投は明るくなってからになる。おそらく砲爆撃は、すではじまっているはずだ。



とてもではないが、無事ですむとは思えない。かといって対潜任務の終了後に、後方基地へ引きあげるといふ命令も出ていなかった。それに燃料も、充分とはいえない。たぶん不時着寸前の状態で、サイパンに帰りつくのではないか。

それはいいのだが、状況がよくわからなかった。進出を予定しているのは、サイパンの北東側海域だった。そんなところに味方の艦船が、航行しているはずがなかった。無論、敵潜水艦の哨戒網からも外れている。そんなところに、何をしにいくのか。

気にはなるものの、問いただしている余裕はなかった。すでに高須二飛曹は、少尉に背をむけて駆けだしていた。澤谷特務少尉もそれにあった。少しでも時間を短縮して、早い時間帯に帰投したいと考えていたのだ。



第一章 重雷装艦大井



1

海上は深い闇につつまれていた。

すでに月は出ているはずだが、空全体に広がった雲のせいで光は感じられない。格納庫の内部からもれ出す光がなければ、足もとさえおぼつかなかった。波飛沫でぬれた甲板は滑りやすく、油断すると海に投げだされそうになる。

空技廠（航空技術廠）の室尾^{むろお}技師にとっては、戸惑うことの多い作業現場だった。これまで航空機関連の仕事ばかり手がけていたものだから、海軍艦艇については門外漢も同然だった。

自分とは縁のない世界だと思っていたが、急に長期間の出張を命じられた。巡洋艦に同乗して、整備員を相手に技術指導をするのだという。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。